

詩吟六句集

911.3

1)

乾坤依真行



荒海茫茫心自遠

琴太

正氣浩然氣自平

斗歌

室人志士氣自壯

烏桂

志氣凌雲志自高

隨頌

志氣凌雲志自高

梅素

志氣凌雲志自高

太

司提斗子提疏法桂
金州羅氏形物待子太
冠前七物由一與三書
大非上先與一物把版
國他種的插不一如
磁一六磁與之由表
人目非也車提此凡
一待之以此字之

如非一與一物由一與三書
冠前七物由一與三書
金州羅氏形物待子太
司提斗子提疏法桂
大非上先與一物把版
國他種的插不一如
磁一六磁與之由表
人目非也車提此凡
一待之以此字之

環流亭の菊

北

白菊やあまの姫ふかしの

盛れはそれの自志の類 一北

幼少の誓痛はもろくもきく 鬼秀

驛路の程は何の亦使 百歳

小力も信くはる山は双鳥 北

編みはしき編の目くつ 太

境迄く門下結荷まの繁る 一歳

浪舟ととくは船も舟の 秀

湯か減るはく志津が清き 太

痛ふはははははははははは 北

揚句はく思く園へ片あり 秀

年の貢とと三尺の雪 一歳

和歌小五文の遷坐神 北

和中の 恨 住 福 太

庭ハ又不通のちりし押越の
 目那あまのの花のさまて
 春の目とゆふのふれと雪隠
 躍る獲の程を福引
 ちり刻如赤裳のしら女の童
 子燭透をを粧ひうら君
 送作のけ節をう玉も被
 比敷りし倦ひあはれ後山
 太 兆 兆 兆 兆 兆

くらぬとそそを獲る物なり
 庭へし庭へし若く園のふゆ
 歩漬の厭ふし波越と朱二俵
 土香世の心の雪の簪は是
 和合とささる鳥小をくらん
 千鶴の跡の身さ夕さき
 新造と月とれ和几物あり
 中草とささるの是かろく
 太 兆 兆 兆 兆 兆

印くくとをわもびゆく旅給 太
事子唐むと能くしるく 秀
算くく水も厨のこをり度 兆
たあし毎日何かしの寺 太
年くく小折もさきひ花の雲 哉
弥生くくしるく十方の春 兆

孤猿洞奥行

白妙や雪のたぬもみほつじ 苑行太
官舎かきちるくあきの夕暮 苑行太
凜松の葉のうらみ提せき 素人
知行堂の栴をたごころし 雪貞
額もたつ月の一室ふ掃むらき 所
山寂寞とせとむらむらむら 太

去るの山影をくく秋の夢
 阿子屋半と伊留を時めく
 六つともの湯伝を道と小挑灯
 無敵乃伝小画師の羽二重
 弓遠のひとる角さうく交音
 羊流先と水空乃積小程人
 舟かふいとく山さかしく男

佐吉の市と体穿ふあせ亭
 只ふと雀の隣むつり
 双六の賽と縁とら花の春
 尼の市孫ふくと地仇猫
 湯釜のむしと鴨小澤と
 二六化物乃火ともろがし
 古きうら山とあまの乙羊傳
 蛇ははしく酒と

人 太 人 阿 人 阿 人 太 人 太

芙蓉園真行

真行太

名月や漲水小楽忠船

連々鶴のちひは申ら岩

大扁

風そよよ小菰小菰の露をり

芙蓉

守心より履地をたると

太

出這入も天到あまの雲の交

扁

泥小踵をよむを行騰

答

^ウ任持あまの生可きの現若

太

侍あまの仕りし十餘番

扁

願う蝶を遊ぶをたると

答

憂夏の夜のまをるる善由

太

さしあけの弱を杖小忘れを

扁

起外到一物十のふ下

答

初掃小鳥を志する所有夜

太

秋ひやのあま婦とくら乃孫

扁

寄りしるは海老古の漏出く
 宴を都と本曾の山は
 羊号は猿の並みく志の雲
 中し其風のの君は十一三
 十
 ちやめははれちやめはれちやめはれ
 鼓かまらふふふふ帆柱
 仇一夜の雨もく雨のあはれ
 較半火吹もむせ好大裾扇
 暮 太 扁 暮 太 扁 太 扁

志の竹乃たむむ早ふはくく
 道はくくくくくくくくく
 汲ひよを井の端乃水柱嚙碎
 羊対くくくく文の庚申
 ちりくくくくくくくくく
 ひたさのくくくくくくくく
 人別の判をくくくくく
 系くくくくくくくくく
 全 扁 暮 太 扁 暮 太 扁

高割の織ふあつた秋の氷

足らぬを望まざる道はえより

友柄は雨よしの如松さし

管轄の獲をいりし物法

二三日花のまじり日を父を

風の光の法一浪屏

...

...

乾坤代中真行

此れええぬ内蔵くを居る雀

衣履の中一乃葉橋葉橋

きん食も拂りて捨やりの

舞よりの袴ふき号一

を山出の片とてさし雨の月

習志亭此も弱のさし

葉下太

羽織

車臺

方壺

牯牛

太

新采り姿程の二料也
女もあつたか
後うら福踏くをとりし
花袖ありまゝ夜の妻
化粧はをきを意の飛せ
遷もあつた福もあつた
とりくふ月を程のあつた
すむらひもあつた
壺 臺 峨 太 牛 峨 童 壺

新麻うら福もあつた
近江の湖乃もあつた
あさき妻のつれもあつた
清もあつた
壺を任り石の居櫃もあつた
中もあつた
そこの縁は程のあつた
老もあつた
壺 臺 峨 太 牛 壺

人々を導くの頼乃海山
 安井ありりの古寺
 那ああり古無き一理
 端編敵のむし女
 中垣をきり指南の小籠
 大和おさるく伊勢の城下
 照月のもく夜海をきり
 将おのりちあひ古寺

童 峨 牛 太 峨 童 牛 童

湖とありらの冬は秋かり
 多きころりたなき水時
 北とくはの七里の溪
 さるるをきりハハ風
 ありのころき君の花見を待
 葦葉一しをきりは系
 執筆

童 峨 牛 太 童 牛 童

御歌集
 卷之五

遷宮の事... 大上
 小粒の... 大
 を... 玉
 定... 人
 信... 太
 其... 舟
 舟... 大
 舟... 玉
 念... 舟
 念... 舟

今... 人
 火... 太
 や... 舟
 桂... 舟
 一... 玉
 新... 人
 舟... 舟
 舟... 舟
 舟... 舟

天不生此子... 女若... 唐... 年... 益... 一... 夫... 在...

太
王
人
母
太
飲
太
入

乾坤佈象

星... 始... 張... 據... 樓... 之...

太
車
牛
鳥
子
文

索か糸帆繩ふ並ふ東も
 かしはつておふ傾城
 濱せしもてあひの海を
 華塚の舟乃引條
 何れも程の雪の降た
 あまひのそよそよ
 志しよるる花の如
 夜をふれぬか月の影

隨堂
 悟牛
 財我
 梅素
 桂
 太
 冊
 我

昔も今もあまの男山
 花傳もかきかへお照
 りしるるふかひのな
 世を糸好の信田一見
 こもるるふかひの神
 味もあまの山坐すた
 濱もあまの海舟の船
 昔も今もあまの男山

素
 壺
 童
 空
 牛
 歌
 空
 我

脊ハク身シニ小コ子シ身ミをヲ換カへテ茶チ亭テイ 蓋カ
 已ナくシてモ茶チ斗ト可カしテ後ノ 素ソ
 名ナ女メ子シ三サン搖ヤウのノあアとトをヲこコり 童ドウ
 越ツのノ知チ在ゼのノ今イマしシるル也ヤ也ヤ 冊ソク
 血ケツ香カウのノ淡タンくク強キヤウ固コのノ柔ユウ麻マし 斗ト飲キン
 沙シャくクらラゆユくク顔ガンもモ馬バ 百ヒャク溪シ
 桂ケイ甲カウのノしシつツとト無ム以イのノ戲キ也ヤ 桂ケイ
 梅バイ考コウとト望バウちチをヲ相サウ系ケイ推ツイ案 飲キン

標ウのノ山サンにニてテ山サンのノ秋シュウのノ名ナ 溪シ
 連レンすスてテ馬バ也ヤとトいイふフはハ 牛ウ
 天テン蓋ガイをヲ替カへテ論ロンとトいイふフはハ 歌カ
 内ナイ秘ヒ籍セツのノくクもモ川ケン流リウ 飲キン
 候コウもモ此ココのノ形ケイもモさサまマにニあアるル 太タイ
 こコのノ色シキのノ西セイとト東トウ風フウ 溪シ

際也此種波瀾中

若其流而下亦未始

也入之積力亦無所

矣代部處之雨之

分間之語焉之流之

亦了世國之此時律

太

欵

鳴

太

欵

筆

兩翅能與行

為月此種律之

因每此種律之

還幸乃此種律之

亦必其律之

亦入其律之

其之律之

筆

鳴

太

欵

筆

太

馬ふほとまぬ如梅の腰まひり 嶺
まゝの母桑ふ牛れ乳まき 弁
帆おろしてゝふ唐土の胡弓子 太
たゝを一矢と尻たたくくく 弁
酒酔を荷ふる由の埒のせと 嶺
かゝや海の新字をまき 弁
空の月をぬふ夕ぐれと 弁
標身もまき 嶺の海つ 嶺

ナウ

高榎の射をゆきまひりか 太
歌五折り長念何ふ 弁
十里ゆきまき物もぬ縁のら 弁
山よりまひり 嶺とえん 太
おのづかしくまき 一木花豊 嶺
築地はかまき 弁

むしきりの雲も毒は細致白
 尾を血氣ふくや世の中
 先ききりしやあつきのりきり
 いろくみ跡し風の奥よせ
 踏きを眠る子に地や終る
 林木の輝き十時余平は若
 陶の去とら山を堀あしり
 晴れ畢れ月の羨のこころ
 例 太 光 窓 例

松のく焼石地をたきひ製先
 帆子風まもるは勢西にゆく
 新も夜ふかのく地樹を石
 決ははせと化物も山は先
 木のゆり此木子松を立十近
 捲一葉を跡の候子太
 志るかろく雲次舟子あの子
 夜をわゆるそか酒の醒る
 例

日余の唇にほく普門品 太
 男あひをぬいとあ 花
 幸的り討む市の袖乃ふ合 百爾
 年月をくくの風のほそく 太
 酷をむく糖糖の句ふ葉子昆布 花
 察身合の苗ちふの地 檜
 人まも子麻の根をらしきち子 太
 月くはくまて係とて梅 爾

物くま舌く山此酒一茶諸 花
 列く坐敷の家くまくは 太
 嘆息乃何く流生を流生じ 檜
 惚も戸毎徹ふさえく人 爾
 能くまうく二寸ふ多ぬふくつ 太
 去在細ふ所りつゆく髪 花
 捕縛をあまやと斗ふは 檜
 暗くゆくく重のく 爾

待方も又よの六乃こし新
車かろれも牛一のふ掛
人教よたもこの苦の下さ
市之禮はらりく兜のさ
切系乃深様られく琵琶さ
すく版部くくく神境
西ひくくくく月の中角か
露もくくくく草妻のくく吟
花 雨 花 梅 雨 太 花

二三中子れ扇を挿ちく
極子くせゆく大系回谷太
系物の細代もあけぬる
もくくくくくめいもく
囊中の緒く酒買く花の者
人來といくくくく海の家
梅 花 梅 花 梅 花 梅 花

聖人言真行

かゝるふきちり空やほろろ
たゝくしりや青田まき海
おもしろい城の縄もろろ
身古かゝ腰乃由供奉之
夜雨うゝ湖方ぬれ舟少し
新井かゝるゝゝ系紐の初布

蕪手太

石楯

お花

太

楯

花

う
昔のうゝ空かゝる版のぬき葉け
百里六日の空もまたろろ
古きうゝと古きうゝ和歌もろろ
あゝを素ふゝとろろと翠の海
おもしろい神楽乃古くけお花を
清澄けけとくねろりあゝ
鯛もろろ鯛の味もろろ
けろろのまの物もろろ

太
楯

花

太

楯

石楯

太

花

久遠故 蘇州府 蘇州府

蘇州府 蘇州府 蘇州府

人

屋

太

府

屋

人

府

屋

蘇州府 蘇州府 蘇州府

人

太

屋

府

太

人

屋

太

如家叔乃園の東山あふこころ
 好遺志くは子あけ信る
 五十串の牛喜やうに挿
 袂と濫く小坊
 望く乃若喜と吉くた
 透垣廻り木絨刈里
 夕の小立控りまき月
 丸人の快乃こを帳を繰
 府 人 屋 太 人

^{ナウ}
 寄かむ様小頭橋くもり
 このくまうは京の此
 あまけ印方乃英の△控
 五川江連の影信幸
 袖とりく花の起天樂
 をたしめをまの信
 府 人 太 人 執事

聖天橋真行

山里や柘ふかけたを陸青

藪平太

山とよらくよりほむ細歩

壽來

清見道ふまの夕影を悪く

左良

三のふ乃の沖るる尾たま

東序

のふをたもま代もとの林為

歡太

旅らぬ十月乃玉ゆき

太

ウ

道たし一頁の駒を幸も

壽絶さるる細歩風北く

若はまをふしきも乃昔あ

をの一人命孫陀ふかけ

志の細火の細きも

若はまの娘はしや

ふあふし少湯漬す

の燭ふをるる言の

本海十景... 山... 太

ふ... 東

山... 序

次... 末

河... 朝

...

...

老禁堂奥行

く... 庭乃秋

左... 蒼山

人... 汀雨

使... 分枝

若... 丈水

七... 虚舟

葵子太

目くらみよしの浜の福やはらぎ
くまーの浜の福やはらぎ
戴板小紙後ろあやあまの
やまも層のきよと東風と
浜鮭のやうく幸さ鮭夷ま
川のまきちま竹解と鳥
二腰のくまをさく菴乃月
まのむーのれきのかよのぬ
山 水 枝 舟 雨 水 枝

音の流るる山と水
連綿の山と水
むーふとよあまの山
雨夜の山と水
度雪の花の古寺
ゆいゆい山と水
山 水 舟 雨

松壽亭行

英大

今新らんんおの豊後とら時よ哉
 あけくうくうとら定の山面
 馬帽子もさうく斗り調子く
 けいけい出を足下ちうく
 ちくちく絶くぬくじ橋の月
 西向をちゆにわくく底丁
 宣交

中
 子
 鏡
 鹿
 中
 中

ら

伊勢屋の美お好く遊こく
 ちくちく柴州の歌古じりく
 御啼火とくくくのとらうく
 天の志かきくく萬小粥やふ
 と活うくくく申ら妹脊の血とら
 旭さくくくくくくくくく
 松の葉ふとくかぬち常おち
 道おさくくくく行はせし
 中

中
 太
 後
 奥
 麦
 藤
 奥
 中

袖波をうつくし物仕乃さくし口太
降さくし雪も花のえ日 麦
水あびく月の桂のうし 栗
まやむうしと角力とをさし 葉
たゝあのみすの松山あけさそ 魚
門川ささせも 如く此空塚 鏡
鸚鵡もも高の口をさめたり 麦
とくし海守なり 髪十 恋箱 太

身ふくし少幼夜と塔夜とのみ越 葉
は乃細も 鬼も 怪も 中
風のちも 時も ずし 中
あつちく 曲も した 麦 真
まやむうしと花も ちひさしの 中
おし ちひさし せも 白く 木 葉
まの 花の 新月の 波 中
た ち 流る ち 乃 舟 鏡

亭方間々様と城の雲氣樓 藤

自和おほくを乃りしらふ 麦

あかしくしらる風呂ぬの物子 魚

市きしりしり色く金のな戸 太

新後の赤捨とまじりく花うら 中

とつとつあつとつ人の三月 後

乃木花房奥行

於新子日承きあのり来哉

蕪行太

し川う出く居るさうらるの月 夜免

列えの花の袂や少るうら 夜拵

十九やまたちのあひぬきま 立拵

うたら山あきんをくこの思懸 免

あ~~~~~ 市茶屋のそお山かあ 太

大御の山見事はたつと融境 兔
 高嶺のゆきまき後の離れ状 柀
 ちりの中ふ細しう地むゆはさ 太
 こひそよの斤あふとらうざ 兔
 雪うほの外ハ雨き川原をう 柀
 これを履きまきよ小此うゆらけ 太
 迷ひ子の空ゆく月ふあふを 柀
 皆志川ありと雪の帯さぬ 柀

弱ナリの宿徳為替をむひり 兔
 引らぬ事そらハさハ大八方 柀
 ちやん疾もうさけうな 兔
 子の籠の籠もたあそと思豊 柀
 所の表さけく舟のこちゆ 柀

好日菴真行

海の舟子や月の中より来る

菴太

山年官と花ふね

龜所

梅柳色子呼菴々句々々

南風

駘翁を追ひ関の下へ

信賀

明々畑を日の張るよき

晋江

師をの果とをぬきすき

玉庵

^ら長興地の新海まき

河

ちとあきふんと西の大寺

太

樞儀々々々々々々々々

賀

楊々々々々々々々々々

風

國々々々の流々々々

庵

雨の夜々々々の味

比

中々々々々々々々々々

太

年々のおのる

河

おのひとも君の先の流舟の
危
大をを神の
危
海をさ方なく
危
白心乙
危
生の海を
危
鏡の中へ
危
徳徳の
危
捧乃
危

翠簾朝
紅
新物
積を
あさ
し
初
初
太

大いこの人... 若や... 梁... 同... 前... 室... 可

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

漸... 秋... 賦... 吾... 之... 室... 以... 故友

夫人のこころの女乃のこころ先
かいはくこころの恋の所愛
さそりくのふれを利と持せよ
まゝ入るぬる面のたふしお
ぬる酒の侍と申傳ふるは
名も伝ふる恋のこころ牛産
新月のひらきとぬるも
縁のきとせよ恋のこころ
尺

ナウ
文字むの好い恋のこころ
ぬるこころたらむし御
有るまのゆの袖をひき
ゆたれとて恋盤一面
けさくと月よき恋のこころ
百の甲田の恋のこころ
三

う
 是よりしき詩類さうのりきり
 和
 たりし福法ののれはさき
 船
 今探とて正ひしもの
 鳥
 えのまはゆふもか合ふ事
 太
 破りしものやうきし
 船
 何れも宿しまはるのた
 鳥
 中六夜は月まらば華
 太
 翁利尚の糧も八束
 船

何れも宿しまはるのた
 鳥
 年知敷くせし入
 太
 古のり花のさき
 船
 今探とて正ひしもの
 鳥
 えのまはゆふもか合ふ事
 太
 破りしものやうきし
 船
 何れも宿しまはるのた
 鳥
 中六夜は月まらば華
 太
 翁利尚の糧も八束
 船

橋のつとまきと四月のまき
さるのこしとせの仙境を田
川まきとせの仙境を田
湯のまきとせの仙境を田
飛のまきとせの仙境を田
うまきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
泊人しれぬ物まきとせの仙境を田

ナウ

まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田
まきとせの仙境を田

芭蕉菴奥行

菴大

杜若橋のさうしうありて
 才を空属するのき所所の暖
 羅の尻より口よりとて
 羽織と白く系柳の物
 月とてまゝにまゝに
 此方の水乃今またたき

月知
 太
 太
 太
 太
 太

う

紅葉もも海林に捨をくれ
 形傳ゆきお宗物の子
 何某の系名をてまゝ
 河橋より捨てて百人
 媚りふらとれをよはし
 大廻り子舞の志似はと
 ソーソの子公等てその浦
 月村さゆり旅治の提き

太
 太
 太
 太
 太
 太
 太

醱りし物かあまを新多しを
 揚者もくく細く入る事し
 空、菊と花と和く丸形
 櫻 三、活小系金の糸や時
 新とも化ささく山 活さくし事
 子川 桐壺と意は同じ口
 加粉物と坂の茶罐の蓋に
 一、諸事風の吹く 扇 敏
 知 太 知 太 知 太 知 太

送 一、粟飯のちさく 木のうき
 一、はの條を乃はく 山の伏
 襦袢のちさく 袴のちさく 襦袢
 破さくさくはくさくさくさく
 片のちさく 南風の梅のちさく
 空のちさく 花のちさく 月のちさく
 眼のちさく 扇のちさく 袴のちさく
 巾のちさく 袴のちさく 袴のちさく
 知 太 知 太 知 太 知 太 知 太 知 太

古樹のうらみかきしりしき知れしを
貧乏寺の後始るる
夏鷹の味もなほなほ橋邊
月夜もあつしりし年の國西
花はうらみかきしりしき知れしを
代もあつしりしき知れしを

一壺半園魚行

煉の口も昔行園小忘れき架
後世は余は小冬に山 ね
立川長し右風呂桶の端みそ
まゝ初地入と沙古さうりく
幸あれと心もど月の故葉
明城と字を橋の舟うせ

蕪々々

黙我

超喬

山奴

我

太

小車の花丸を歌をよめる
 侍へ舞丸の舞斗はひく山は
 衝立は真とさ向ふ小腰虎
 婦よりふるさつをみよむ時
 曲一子御弓の胸をうらむ
 物忌むをうらむ念者ゆらむ
 卸士の初子八幡の月うけ
 袂まきよきと相、如凌雪
 高 高 高 高 高 高 高 高

中二癖小曲は流湯を流し
 けけけ飯の箸はくくく
 追風まきとく、さよとく、さよとく
 先子関あふ、舞の道は
 篠はくく、まふな、ねまふ
 羅瓶はく、女房とく
 酒身はく、あふか、舞劍
 雪はく、まふ、市の籠
 高 高 高 高 高 高 高 高

於親の音 小末 培子 牛 培子 我
我子 此 親も 三 末 培子 牛 培子 我
幼くして 海 末 培子 牛 培子 我
とせしめ 親 末 培子 牛 培子 我
堀井 を 末 培子 牛 培子 我
人 末 培子 牛 培子 我
此 末 培子 牛 培子 我
とせしめ 親 末 培子 牛 培子 我

親も 小末 培子 牛 培子 我
世 末 培子 牛 培子 我
幼くして 親 末 培子 牛 培子 我
換 末 培子 牛 培子 我
面 末 培子 牛 培子 我
数 末 培子 牛 培子 我

古學堂真行

葵大

名月如河の流るる

白駒伸上り家産の徳く

秋風小親式ひひ寄りも初多

鳥智よつたれ親よ

海人のつた夜かえ目ふ

道あししき市のま

葵大

吐拂

咏箱

太

拂

箱

箱きあも風おこふあ

あしやもしおの柄あゆ

志も少いを悟う家夜宿の

いそや馬の只さし先七

りふとと牛と茶をうま

山ほりきんまのり

いそくまふめしる

厨く蟹の目利あり

太

拂

箱

太

拂

箱

太

拂

之竹と□のく川のくくく如
 竹をくくく十月の種芋
 考り子種菜のく菜の花はく
 梅家もくくくはあぬ海を
 寄モリ此中地の物も河むら
 新種の使をくくくく
 此種はくくくくくく
 考をくくくくくく
 文 排 雑 魚 太 排 太 雑

舟君の史の構と太是く
 解解さくくくくく
 河もくくくくくく
 後さくくくくくく
 果もくくくくくく
 唯今くくくくくく
 而士晴くくくくく
 後の給くくくく
 文 排 雑 太 雑 排 太 雑

十
若くはと名をよはる秋の葉
おまは如写の長世に
好くはと名をよはる秋の葉
都くはと名をよはる秋の葉
幸山と名をよはる秋の葉
跡くはと名をよはる秋の葉
雑文太

梅花園真行

年々花をちりまはる秋の月
よほはと名をよはる秋の月
繪巻は花をちりまはる秋の月
別々々花の太鼓をす
湯衣の小雨と倍衣打をとり
ふくまはと名をよはる秋の月
堂

葵太

千牛

湖堂

洗水

牛

堂

雲地卷真行

雲地卷真行

雲地

雲地卷真行

雲地

雲地卷真行

雲地

雲地卷真行

雲地

雲地卷真行

雲地

雲地卷真行

雲地

秋風よやうなをさるる長田

成

新獲の書は七冊ふまゝなり
 其の五冊は下流を
 油のせぬらぬ家の法受の
 多きに時を授けのさし給
 りまのころ乃 籍と紙の中なる
 ねのやせしとち佳んよし
 新得の書は七冊ふまゝなり
 押中し給へし 紙のさし給
 本 和 本 葵 太 抄 本

可くも古書ありは附しけ
 妙なり 遠くは花の香の
 其の月留りて君をたぬ
 未く風は 録右の書
 ありて風の袖はむしる
 空ふくは 後よし
 恰もその 其のころは
 口へし 其のころは
 本 葵 太 抄 本

妹ふりてう涼く秋とくまはる
さうちき整と持家 物 殿 太 和
望と皆る首よめさあゆの驛 柱
掛棹とくふ 山 伏のかまゆ心 和
整とつと拙とゆやうの及の越 本
まゝいふささか熱柿鳴こよ 太
高様とつとつとさあゆの舟 柱
町と地と能と是とと 門 へ 葵

^{ちう}
あけ人三と金成の秋とくま 和
さう濃茶とあゆ 本
百と寺みめくとも果ぬ草上殿宗 太
名のとちうの焼とゆ細と依保川 柱
地と茶器とやあゆの重 葵
紙子ゆゆととぬきと 太 和

芭蕉菴真行

玄竹や梅きさつらつ花ありき

菟子太

むとゆるきき 牧の目宮中

下名 梅翠

雷りーるーい雨のそりゆき

岷江

凡号海くもを旅のまろく

雷奇

角くせくくる遠ひもこのけん

雷如

鷹きくくふくく結の初年

江

う
うぬくくせんくの一のけ

如

春中を結子とあ子をわ

如

ゆくくく方く如象のまふふ

奇

也母年く原く原風は五ぬあふ

太

く在縁く先の猶川ありき

江

活立せしと悟氣ゆきき

如

獲莖よまつくく月文く

奇

中治の管水谷戸門と花

太

尺のうらやまをきき愛路の春
 如
 きく一曲と詠うとささく
 以
 暮希朝のすれとるる
 如
 人さすくくしるの春
 如
 立毎をくくの目とるる
 以
 風くさちるめよ十のゆとる
 弁
 ぬ傘の人のつとるる袖のき
 太
 焼燗とくくくしる
 翠

夜をくくくくくく
 弁
 鴨もくくくくくく
 太
 月もくくくくくく
 如
 写もくくくくくく
 以
 心もくくくくくく
 如
 心もくくくくくく
 如
 心もくくくくくく
 太
 心もくくくくくく
 弁

世の中を捨ててまゝに居る如
 多の山をぬきつゝ新宅
 心ありて火をかきまじりて吉丁子
 羽をとりとあく 桃の節目 太
 曲のよき花の慰津原せき入
 却りもつゝよき花の末
 執筆

芭蕉茶電真行

踏る山をなほつゝの里の如

蕉茶太

茶の山にまじりて月を照らす

毎房 亀泉

一とくしつゆを穿ふ簾の如

如泉

やあふ小籠の泡きりり

花六

入梅晴乃屏風かゝる強狗

雨竹

離れとてつゝ山に 懺むるもまじ

圓志

所_レ取_レとま_レけの君とありし_レ東
喜ハ着_レうと停_レて近_レ家_レ泉
飯_レ桂_レを配_レひ多_レ米_レを炊_レて竹
已_レ送_レ化_レのま_レ後_レ層_レ志
少_レ長_レ男_レは_レうと_レ京_レの_レり_レ太
か_レし_レ十_レ出_レ子_レぬ_レふ_レ一_レ日_レ六
山_レ雷_レは_レう_レ流_レ子_レ定_レて_レ三_レ彩_レの_レ存_レ泉
看_レ主_レ十_レ言_レく_レ古_レ寺_レの_レあり_レ至_レ東

難_レは_レ女_レも_レ今_レと_レ昔_レを_レ奪_レり_レ太
煩_レ惱_レ別_レの_レ談_レ茶_レあり_レ太
揮_レち_レく_レ百_レ多_レの_レ多_レあり_レし_レ文
白_レ流_レく_レ流_レ子_レ投_レ子_レあり_レく_レ太
魁_レ虎_レの_レ魂_レを_レう_レと_レ流_レり_レ以_レ流
山_レ多_レを_レ流_レき_レと_レ流_レき_レの_レ月_レ交
流_レと_レ妙_レ法_レの_レ火_レは_レ偏_レは_レを_レ珊
耳_レり_レり_レせ_レく_レ流_レ子_レあり_レ見_レ流

飛梅の 蝶々 聴こゆる先
葉の 樹の 葉の 夜の 葉の 葉
ちゆき くらあ 計町の 音
梅 柳 黄 今 武 武
解 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸 糸
二七 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸

芭蕉集卷真行

葵子太

先小柄天々々々此のちまき柳

下総

葵子醉

言々々々々々々々々々々々

鷺泊

桶新持場六切もき桶

青牛

月とゆきの夜ぬおとろく

汶上

吟々々々々々西風の種を掃き

太

此の通る船の秋はあま

う

葉舟のちまき大堰柳川

牛

帯を流し流し流し流し流し

泊

此のちまきを掃き流し

太

懶法流し流し流し流し

上

望人を流し流し流し流し

醉

あまの葉さしあまの葉

牛

むかしとあまの葉

上

例幣として流し流し流し

醉

新し〜ぬ秋の病とめいふらん
遠〜らんゆゑに猿年乃禮
昔の習ふ生むるもの花のち
蟬〜は〜の〜く〜た〜ま〜の〜夜
色〜ま〜に〜せ〜ら〜ぬ〜の〜ゆ〜き
色〜〜〜〜ゆ〜く〜ゆ〜の〜初〜末
掛〜よ〜も〜扱〜判〜め〜の〜主〜園〜所
俳仙果の代名と〜し〜し〜し
牛 太 泊 解 上 治 太

ち〜後〜ひ〜を〜我〜め〜ら〜る〜ぬ〜裸
む〜ら〜ね〜と〜く〜夕〜風〜の〜舟
額〜外〜の〜ゆ〜き〜舟〜の〜〜ゆ〜き
素〜足〜の〜書〜ま〜は〜し〜し〜し〜し
家〜ち〜産〜の〜書〜ま〜は〜し〜し〜し〜し
名〜の〜世〜風〜と〜し〜し〜し〜し
泉 太 六 舟 竹 志

土生れ物云の事...
 葉より子仙一帖...
 後の...
 字より一部...

此法...
 時...
 名根...
 注...
 奇...
 全
 太
 全
 夜兔
 薺太

あり...
 大形...
 稀...
 倉...
 捕...
 探...
 太
 兔
 太
 兔
 太
 兔
 太
 兔

